

R Markdown で日本語 beamer プレゼンテーション (XeLaTeX) 版

ill-identified

2021-04-14

Нужны новые формы. Новые формы нужны, а если их нет, то лучше ничего не нужно.

新しいフォーマットが必要なんですよ. 新しいフォーマットが. それがないというなら, いっそ何もないほうがいい.

— A. チェーホフ『かもめ』

目次

イントロダクション

使い方/用例

用例: 図表の挿入

外部資料の引用方法

基本的なカスタマイズ

トラブルシューティング

イントロダクション

このスライドは何？

- あまり情報が流れていない, R Markdown と beamer で日本語を含むスライドを作るためのテンプレート兼用例集
- reveal.js など HTML 媒体は他の資料を参照
 - [ここ](#)や[ここ](#)を見よ
- もともとは自分用に作ったテンプレだったものを万人向けに修正

想定される用途

- Tokyo.R など R を使った話を発表する際の資料作成
- 技術・アカデミック寄りの話題を想定
- 具体的に要求されるもの
 - **日本語表示**
 - ラスタまたはベクタ画像の挿入
 - 表の挿入
 - R コードを見やすく表示
 - 参考文献の相互参照/リスト自動生成
 - **LyX や overleaf より簡単であること**
 - **なんかナウでオサレな感じは求めてない**
 - 自由すぎるデザインは不可

先行事例の紹介

- 伊東『R Markdown と Beamer でプレゼンテーション資料作成』
 - Lua \LaTeX を使って日本語で Beamer スライド作成
- Atusy『R Markdown + XeLaTeX で日本語含め好きなフォントを使って PDF を出力する』
- 先行事例との違い:
 - 使用者が設定を書く負担削減のためテンプレート化
 - フォントやテーマなどデザインに関する大まかな選択の余地
 - X \LaTeX / Lua \LaTeX 両方に対応
 - 日本語文献 bib ファイル・bst ファイルに対応
 - 充実したスライド作例

reveal.js じゃダメなの?

- 検索がしづらい
- 個人的にデザインとかあまり好きじゃない
- 上下左右に動いて空間識失調になる
 - (個人の体験です)
 - 上下のみにもできる
- html よりも不変な媒体にしたい
 - pdf が明確に優れているかは怪しい
- ~~Q: お前が使いこなせてないだけじゃないの?~~
 - ~~A: うるさい~~

パワーポイントじゃダメなの？

- 私は持っていない
- シンタックスハイライトが面倒
 - 注: パワポの場合はVSCodeかreprexでコピペ
- ドラッグ & ドロップで位置調整は便利
- しかしポンチ絵芸術になりがち
- 極力シンプルにして視線誘導の負担をなくすべき
 - 徹底するかは好みの問題

使い方/用例

セットアップ

1. パッケージのインストール

```
remotes::install_github(  
  "Gedevan-Aleksizde/my_latex_templates",  
  subdir = "rmdja"  
)
```

2. TeXLive (>= 2020) のインストール

- 分からなければ [TeX wiki のページ](#) を参考に
- Debian/Ubuntu のユーザは apt より公式ダウンロードの方が良いかも

基本 (1/2)

1. yaml ヘッダに以下を書く

- 詳しくは example/ のテンプレートを参考に

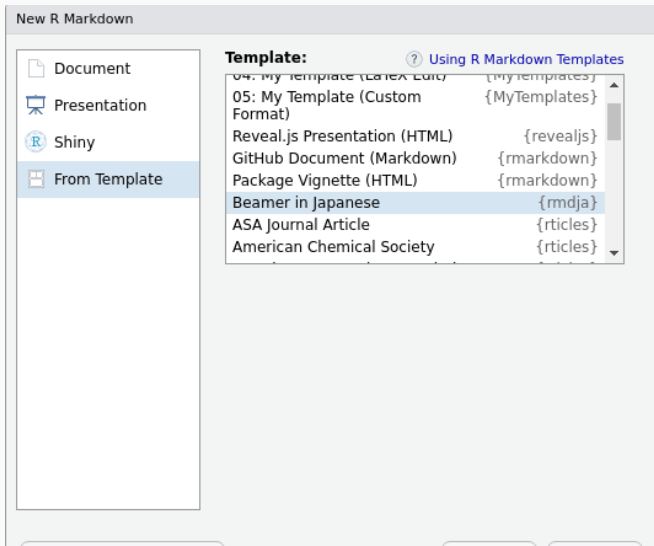
output: rmdja::beamer_presentation_ja

2. RStudio のツールバーの “Knit” を押す



基本 (2/2)

- またはテンプレートから選択



最低限必要な設定

- フォントが OS ごとに異なるのが問題
- このファイルの設定なら Linux / Win / Mac のいずれでも動く？

```
output:  
  rmdja::beamer_presentation_ja:  
    latex_engine: xelatex  
mainfont: "DejaVu Serif"  
mainfontoptions:  
sansfont: "DejaVu Sans"  
monofont: 'Courier New'  
jfontpreset: "noto"
```

基本構文 (1/2)

- markdown 的な書き方でできる
- “## タイトル” でスライドの開始

節見出し

タイトル 1

- **** 太字 **** ****bold****
- 強調 _emph_
- **`タイプライタ体`** **`mono`**
- ~~ 取り消し線 ~~

- 太字 **bold**
- 強調 *emph*
- タイプライタ体 `mono`
- 取り消し線

基本構文 (2/2)

- \LaTeX コマンドも挿入可能
 - うまく行かない場合は $\backslash \dots \text{\texttt{\{=latex\}}}$ “で囲む
- \LaTeX 使用例: \LaTeX で文書にルビも打てる
- ルビ表示は $\text{\textcolor{red}{pxrubrica}}$ の構文を参考に

ソースコードの表示

- 以下で対応言語一覧がわかる

```
names(knitr::knit_engines$get())
```

```
[1] "awk"          "bash"          "coffee"        "gawk"
[6] "haskell"      "lein"          "mysql"          "node"
[11] "perl"         "psql"          "Rscript"        "ruby"
[16] "scala"        "sed"           "sh"             "stata"
[21] "highlight"    "Rcpp"          "tikz"           "dot"
[26] "cc"           "fortran"       "fortran95"      "asy"
[31] "asis"         "stan"          "block"          "block2"
[36] "css"          "sql"           "go"             "python"
[41] "sass"         "scss"          "theorem"        "lemma"
[46] "proposition" "conjecture"    "definition"15"e
```

Beamer や RMarkdown 使用に役立つ資料

- 伊東『R Markdown と Beamer でプレゼンテーション資料作成』(Lua \LaTeX 使用)
- 松田『Beamer 読本-講演用スライド作成のために-』
- Kazutan『R Markdown によるスライド生成』『R Markdown 入門』
- Atusy『R Markdown + XeLaTeX で日本語含め好きなフォントを使って PDF を出力する』
- R Markdown 2.0 チートシートの日本語訳, Takahashi, M. 訳

もう少しわしいやつ

- Atusy 『R Markdown ユーザーのための Pandoc's Markdown』
- 謝益輝 (yihui) “knitr - Elegant, flexible, and fast dynamic report generation with R” (開発者本人)
- Xie, Yihui & C. Dervieux “R Markdown Cookbook”

今回使うパッケージ

- この用例作成には以下パッケージを使用

```
01 require(conflicted) # パッケージの競合防止用
02 require(tidyverse) # 全般
03 require(ggthemes) # ggplot2 のデザイン変更
04 require(ggdag) # ネットワーク図の用例に
05 require(DiagrammeR) # DOT 言語でのネットワーク
    ↪ 図例
06 require(kableExtra) # 表の出力オプション
07 require(stargazer) # 複雑な LaTeX の表を扱う例
```

- 以下はインストールのみ/読み込む必要なし
 - citr: 引用文献の挿入を GUI で
 - bookdown: 数式を GUI で

ソースコードの表示: 基本事項

- `echo=T` でチャンク内コードを表示
 - デフォでは非表示
 - **自動でシンタックスハイライト**
- はみ出す場合は `tidy=F` して手動改行
 - 日本語等で折り返し地点がうまく行かない
- `class.source = "numberLines, LineAnchors"` で行番号表示 (**参考**)

ソースコードの表示: 出力例

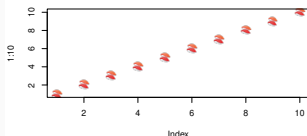
```
```{r, echo=T, class.source = "numberLines, Line  
require(conflicted)
require(tidyverse)
require(ggthemes)
```
```

```
01 require(conflicted)  
02 require(tidyverse)  
03 require(ggthemes)
```

カラー絵文字

- **BXcoloremoji**をインストール
 - `\coloremoji{}` で絵文字表示: 🍣
 - 実際には**画像に置き換えている**
- グラフ描画には特に設定必要なし
 - ソースコード上のものは文字化けする

```
plot(1:10, pch = "🍣")
```



数式の挿入: 行内 (インライン)

- markdown 風の LaTeX コード埋め込み
- \LaTeX の数式を $\$$ で挟む
- 例: らんま $\frac{1}{2}$
 - 出力: らんま $\frac{1}{2}$
 - 注: 行内で分数はスラッシュ使ったほうが見やすい
- 数式にはセリフフォント使用
 - スライドはサンセリフが良いとされる
 - しかし数式の統一感がない
 - (個人の好み?)

数式の挿入: 独立行

- \$\$ で挟んだ範囲に \LaTeX 構文

```
$$\begin{aligned}& \sin^2(x) + \cos^2(x) = 1\\& f(x) = \\& \quad \hookrightarrow \frac{1}{(2\pi)^2} \int_{\mathbb{R}^n} \hat{f}(\omega) \exp(i\omega x) d\omega \\& \end{aligned}$$
```

$$\sin^2(x) + \cos^2(x) = 1$$

$$f(x) = \frac{1}{(2\pi)^2} \int_{\mathbb{R}^n} \hat{f}(\omega) \exp(i\omega x) d\omega$$

数式の挿入: bookdown パッケージのアドインで補完

1. RStudio のツールバー “Addins”
2. “Input LaTeX Math”

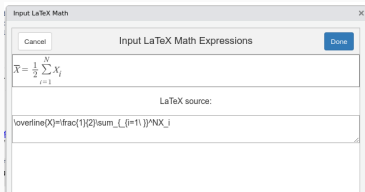


図 1: bookdown の数式入力機能

- 一部対応していない記号もある?
 - `\mathbb{}` とか `\hat{}` とか
- 数式のみで `\aligned` 等環境の入力は不可

用例：図表の挿入

図の挿入: 画像ファイル貼り付け

- `out.width=out.height=` でサイズ調整
- jpeg, png, eps, pdf に対応
 - \LaTeX の制約
- デフォルトでは縦に並べる
 - 横並びにしたい場合は `fig.show="hold"`

```
knitr::include_graphics(file.path(
  file_loc,
  c("img/tiger.eps", "img/tiger.pdf",
    ↪ "img/tiger.png")
))
```



図の挿入: markdown 構文で貼り付け

- `out.width=/out.height=` が適用されない
- pandoc 構文でサイズ指定

```
![The Tiger](img/tiger.pdf){ height=30% }
```



図 3: The Tiger

図の挿入: ggplot2 のグラフ

- `fig.cap=` でキャプションを設定可能.
`labs(title =)` と違い自動相互参照あり

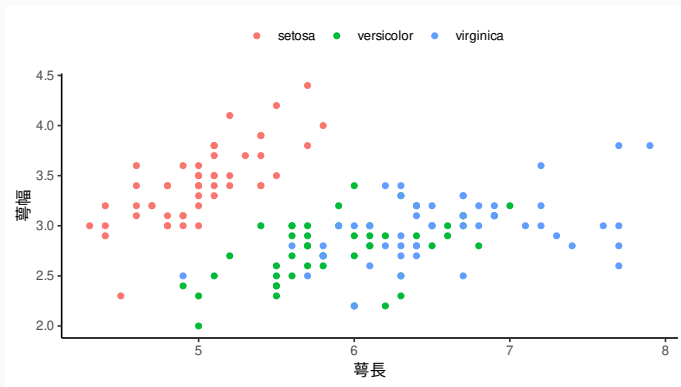


図 4: ggplot2 の出力例: iris データ

図の挿入: 文字の大きさをそろえるには

- 出力された画像ファイルの文字が小さい!
- その原因は

1. 自動縮小されるため

- 込み入った話なので次のスライドへ

2. 単位が違うため

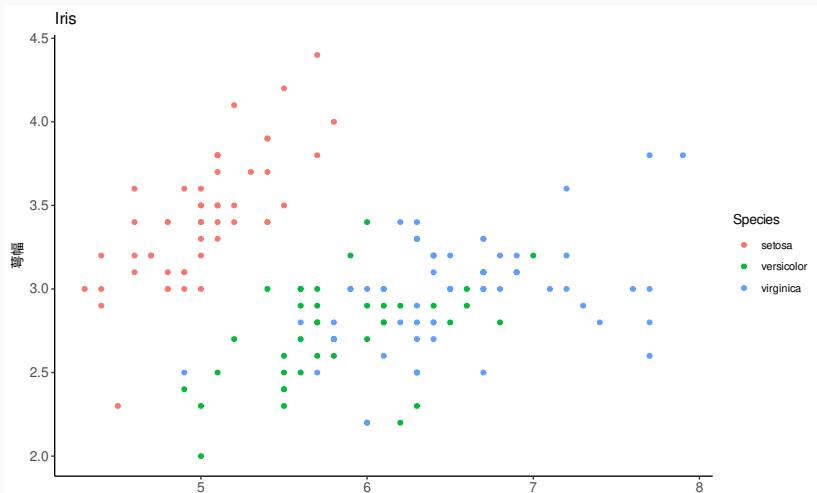
- beamer は主に **pt** 単位
- ggplot2 は `annotate()` のみ **mm** 単位
- 補足
 - `cairo_pdf()` の `pointsize` はビルトインデバイスにのみ影響
 - 『**ggplot2 の size が意味するもの**』

図の挿入: 画像サイズの基本ルール

- R が作図したファイルを一旦保存し, 拡大縮小して貼り付けられる
 - `fig.width/fig.height` は**保存時のサイズ**
 - `out.width/out.height` は**表示するサイズ**
- R の保存サイズと beamer スライドのサイズのデフォルトは違う
 - スライドは **5.04 x 3.78 in (128 x 96 mm)(4:3)**
 - `ggsave()` は **9.11 x 5.77 in** で保存
- RStudio のビューアは文字の大きさ**固定でサイズを画面に合わせる**
 - **違和感の正体 (?)**

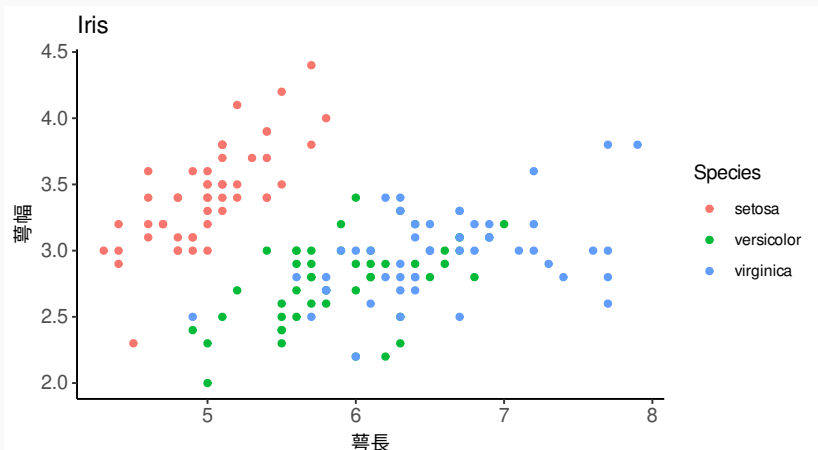
図の挿入: 幅 100% で出力

- 注: `out.width="100%"` はスライドサイズではなく
本文領域の相対サイズ



図の挿入: beamer サイズで保存, 幅 100% で出力

- 相対的に文字が大きくなった



図の挿入: 字の大きさをなるべく揃える

- 基準を beamer に合わせる方法
 1. 保存時サイズを beamer の画面サイズと同じにする
 2. `theme_*`() で `base_size` を beamer の文字サイズと同じにする
- `out.width="100%"` のとき, グラフタイトルと本文のサイズが一致
- 拡大縮小に合わせて文字の大きさを調整する
- 横長のグラフなら `fig.width=` を調整する
- ユーザは `theme_*`() の文字サイズのみ**手動**で書く
 - `theme_set(base_size =)` で統一すると楽

図の挿入: 再現可能なポンチ絵

- 概念図とかの図示はどうするか
 - NOT データの視覚化 (ビジュアライゼーション)
 - ggplot2 の本来の使い方ではない
- ggdag はネットワーク図に使える
 - 因果ダイアグラム, 遷移図, グラフィカルモデル等
- ggforce はベン図の描画に応用可能
 - 世間的にはグラフの部分拡大用パッケージ?
- 詳しくは個別のマニュアル参照
- 霞が関流ポンチ絵は専門外

図の挿入: ポンチ絵の例 1

- 以前作ったやつ^の修正

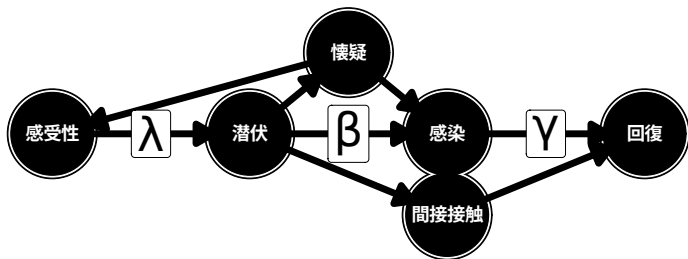


図 5: ggdag で作った YJ-SEIR モデルの遷移図

図の挿入: ポンチ絵の例 2

- `ggforce::geom_circle()` を利用
 - 参考: [How to Plot Venn Diagrams Using R, ggplot2 and ggforce](#)

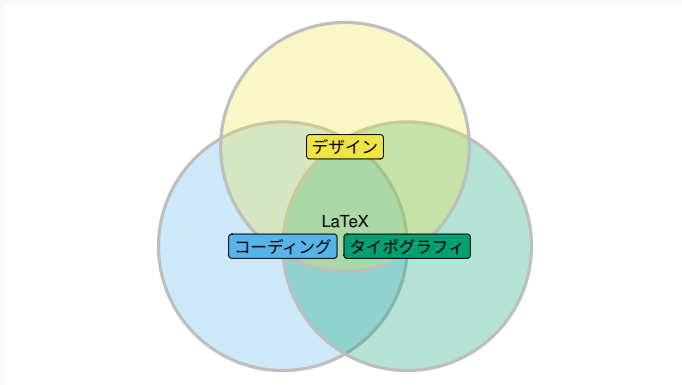


図 6: ベン図の例

図の挿入: DiagrammeR で DOT 言語で書く

- `DiagrammeR::grViz()` で DOT 言語によるグラフィカルモデル描画
 - 注: `fig.show="hold"` にすると正しく出力できない

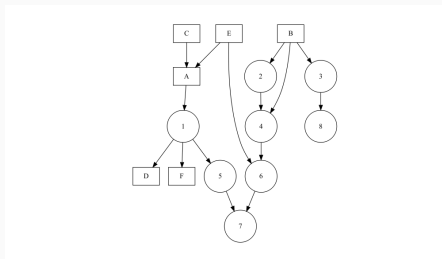


図 7: DiagrammeR による作図

図の挿入: R 以外のデバイス

- \LaTeX の tikz を使用可能
 - tikz を知らない人は[ここ](#)や[TeX Wiki](#)を読む
 - 現時点では日本語表示が面倒 ([参考](#))
 - ~~そこまでやるなら全部 \LaTeX でいいのでは?~~

表の挿入: データフレーム

- デフォルトの表示

```
data(iris)
print(head(iris))
```

| | Sepal.Length | Sepal.Width | Petal.Length | Petal.Width | Species |
|---|--------------|-------------|--------------|-------------|---------|
| 1 | 5.1 | 3.5 | 1.4 | 0.2 | setosa |
| 2 | 4.9 | 3.0 | 1.4 | 0.2 | setosa |
| 3 | 4.7 | 3.2 | 1.3 | 0.2 | setosa |
| 4 | 4.6 | 3.1 | 1.5 | 0.2 | setosa |
| 5 | 5.0 | 3.6 | 1.4 | 0.2 | setosa |
| 6 | 5.4 | 3.9 | 1.7 | 0.4 | setosa |

表の挿入: データフレームを `kable()` で表示

- \LaTeX 風の表になる
 - 詳しくは `knitr::kable()` や `kableExtra` のマニュアル

```
data(iris)
kable(head(iris[, 1:3]),
      caption = "kable() による表示"
)
```

表 1: `kable()` による表示

| Sepal.Length | Sepal.Width | Petal.Length |
|--------------|-------------|--------------|
| 5.1 | 3.5 | 1.4 |
| 4.9 | 3.0 | 1.4 |

表の挿入: 外部の.tex ファイル

- \LaTeX でかかれた表を貼り付けて掲載
 - `\input{tab.tex}` でコピペなしで貼り付け可
 - **リサイズは手動で**
- 以下, 表を一旦.tex ファイルで出力してから読み込む
 - R 上で生成した TeX コードなら**直接出力可** (2 枚後のスライド参照)

表の挿入: .tex で書かれた表を掲載

| | Sepal.Length | Sepal.Width | Petal.Length | Petal.Width | Species |
|---|--------------|-------------|--------------|-------------|---------|
| 1 | 5.10 | 3.50 | 1.40 | 0.20 | setosa |
| 2 | 4.90 | 3.00 | 1.40 | 0.20 | setosa |
| 3 | 4.70 | 3.20 | 1.30 | 0.20 | setosa |
| 4 | 4.60 | 3.10 | 1.50 | 0.20 | setosa |
| 5 | 5.00 | 3.60 | 1.40 | 0.20 | setosa |
| 6 | 5.40 | 3.90 | 1.70 | 0.40 | setosa |

表の挿入: stargazer の表示

- `{r, results="asis"}` で出力 tex コードを直接表示
- stargazer の使い方は[矢内氏の解説](#)や[私のブログ](#)参照

```
fit1 <- lm(Sepal.Length ~ Petal.Width,  
  ↪ data = iris)  
fit2 <- lm(Sepal.Length ~ Petal.Width +  
  ↪ Petal.Length,  
           data = iris)  
stargazer(fit1, fit2,  
           header = F, type = "latex",  
           digits = 2, digits.extra = 0,  
           ↪ align = T,
```

表の挿入: stargazer の出力結果

表 2: 回帰分析の結果

| | モデル 1 | |
|-------------------------|-------------------|-------------------|
| | 萼長 | |
| | (1) | (2) |
| 定数項 | 4.78***
(0.07) | 4.19***
(0.10) |
| 花弁幅 | 0.89***
(0.05) | -0.32**
(0.16) |
| 花弁長 | | 0.54***
(0.07) |
| Observations | 150 | 150 |
| Adjusted R ² | 0.67 | 0.76 |
| F Statistic | 299.17*** | 240.95*** |

表の挿入: markdown 構文

Table: 得点一覧


| クラス | 科目 | 平均 |
|-----|----|--------|
| A | 算数 | \$90\$ |
| B | 算数 | \$95\$ |

表 3: 得点一覧

| クラス | 科目 | 平均 |
|-----|----|----|
| A | 算数 | 90 |
| B | 算数 | 95 |

外部資料の引用方法

ハイパーリンクの挿入

- url は自動でリンク
 - <https://rstudio.com/>
- markdown 方式のリンク
 - [RStudio](https://rstudio.com/)
 - [RStudio](#)
- 画像にハイパーリンク  RStudio[®] を貼ることも可

文献引用の方法

- `[@ref]` で番号引用: `\citep{ref}` ([1]) に対応
- `@ref` で著者名引用: `\citet{ref}` (hoge hoge et al.) に対応
- `[@ref1; @ref1]` で連番引用 [1, 2]
- 以下引用テスト

`[@R-tidyverse; @R-rmarkdown; @rmarkdown2018; @R-bookdown]`

`[@R-citr; @wickham2016Data; @okumura2017LaTeX]`

`[3, 1, 6, 5] [2, 4, 7]`

文献引用の補助: 引用子の補完

- 重複・書き間違えの防止
- citr パッケージを使うと楽
 - ツールバーの Addins から選択
 - zotero 連携機能あり

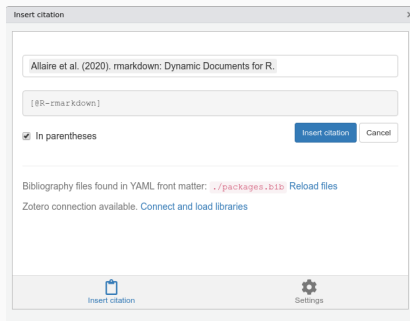


図 8: citr パッケージの GUI

文献引用の補助: 文献管理

- Mendeley, Zotero, ReabCube の 3 つが多い?
- 私は Zotero を使っている
 - 多言語対応, 連携機能の充実, 料金などの理由
 - 参考: 『Mendeley Exodus Mendeley から Zotero への移行の手引き ~』
- RefManageR パッケージ
 - R で bib ファイルをパースしたりする
 - 文献管理用には既存ソフトで十分?

基本的なカスタマイズ

フォント変更: 欧文 (1/2)

- 欧文/和文それぞれ 3 種類指定できる
- 欧文フォントは `fontspec` で制御
 - **yaml** トップレベルで指定
 - beamer なので `main` という名に反して**サンセリフ**が主に使われる
- それぞれに `*options` というオプションパラメータ指定が可能
 - 相対文字サイズの手動調整などに使う

フォント変更: 欧文 (2/2)

- 設定例

```
mainfont: <欧文フォント>  
mainfontoptions:  
  - Scale=1.1  
  - Ligatures=TeX  
sansfont: <欧文サンセリフ体フォント>  
monofont: <等幅フォント>
```

フォント変更: 和文

- 和文フォントは**フォーマット関数**の下で指定
- こちらもゴシック (サンセリフ) がメイン
- こちらも *options がある

```
jmainfont: <和文フォント>  
jmainfontoptions: <オプション>  
jsansfont: <和文ゴシックフォント>  
jmonofont: <和文等幅フォント>
```


フォント変更: 和文プリセット

- 和文フォント指定は**プリセットを使うと楽**.
- 対応フォント: Noto, IPA, 原ノ味, ヒラギノ, 游, モリサワ, 小塚, MS など
 - プリセットにないものは手動設定
 - Lua \LaTeX は[ここ](#)や[公式ドキュメント](#)を参考に
 - Xe \LaTeX は[ここ](#)や[公式ドキュメント](#)を参考に
- \LaTeX に詳しくないなら Lua \LaTeX を使うと無難
- 個別設定とプリセットでは**プリセットが優先**される

フォント変更: 和文プリセットの設定例

```
jfontpreset: noto-otf
```

```
jfontpresetoptions:
```

- match
- deluxe
- no-math

フォント変更: 和文フォントプリセット

- 詳細: $\text{X}\text{\LaTeX}$, $\text{Lua}\text{\LaTeX}$

表 4: 主なプリセット名対照表

| フォント | $\text{X}\text{\LaTeX}$ | $\text{Lua}\text{\LaTeX}$ |
|------|-------------------------|---------------------------|
| ヒラギノ | hiragino | hiragino-pro |
| MS | ms | ms |
| Noto | noto/noto-jp | noto-otf/noto-otc |

- 游書体は OS バージョンごとに異なる
 - `ym-win`, `yu-win10`, `yu-osx`
- Ubuntu で Noto を選ぶ場合は `noto` で OK
- 上記以外にも多数

インラインでのフォント変更

- 明朝/ローマンにしたいなら `\textrm`
- 本文中の一部だけフォントを変更したい時は `\jfontspec{}` を使う
 - 欧文なら `\fontspec{}`
- 詳しくは [ここ](#)

ここはいつものフォント.

`\textrm{ここだけ明朝 Mincho}` `{=latex}`

ここはいつものフォント. ここだけ明朝 Mincho.

スライドのテーマ変更

- 指定できる名前一覧は[ここ](#)を参照
 - metropolis テーマはあまりカラーバリエーションがない
 - 数式をサンセリフにしたい場合は以下のように
 - rownumber_chunk= デフォルトで行番号を付けるかどうか

output:

```
rmdja::beamer_presentation_ja:  
fonttheme: professionalfonts  
rownumber_chunk: true
```

シンタックスハイライトのテーマ変更

- テーマは以下が用意されている
 - default, tango, pygments, kate, monochrome, espresso, zenburn, haddock, breezedark, textmate
 - 参考 [Xie Yihui のドキュメント](#)

```
output:  
  rmdja::beamer_presentation_ja:  
  highlight: tango
```

ハイパーリンクの色の変更

- YAML ヘッダの**トップレベル**に記述する
- linkcolor スライド内リンク
- citecolor 参考文献リストへのリンク
- urlcolor url リンク
- デフォルトで可以使用の色名は[ここ](#)を参照

```
linkcolor: blue
citecolor: green
urlcolor: red
```

アスペクト比の変更

- 1610(16:10), 149(14:9), 54(5:4), 43(4:3), 32(3:2) から選べる
- 160 mm x 90 mm にする例
 - 出力画像も合わせたほうが調整しやすい

```
output:
  rmdja::beamer_presentation_ja:
    fig_width: 6.29921
    fig_height: 3.54331
aspectratio: 169
```


引用形式の変更

- 3 種類の出力方法
- natbib 以外で良いなら **TeXLive** 不要
- natbib
 - `jecon.bst` が使える
 - **TeXLive** が必要な原因
- biblatex(+biber)
 - 有力な日本語フォーマットがない?
 - **TeXLive** 不要
- citeproc: pandoc-citeproc の機能
 - csl ファイルで参考文献リストの体裁指定
 - **TeXLive** 不要

引用形式の変更例

- 今回は natbib パッケージを使用
- natbib で「著者 (出版年)」表示にしたい場合は以下.
 - その他のオプションは [natnotes.pdf](#) を参照

output:

```
rmdja::beamer_presentation_ja:  
  citation_package: natbib  
  citation_options: authoryear
```

参考文献リストの変更

- .bib, .bst は以下にファイルパスを指定する
- .bst は TeX 側が認識していればフルパス・相対パスである必要なし

```
bibliography: examples.bib  
biblio-style: jecon
```

「図」「表」の表示

- 図や表を掲載するとキャプションの先頭に「図 X」「表 Y」などと表示される
 - “Fig.”, “Tab.” などと表示したい場合は以下のように変更
- 参考文献リストを載せる場合, `biblio-title` で見出しを変更できる

```
output:  
  rmdja::beamer_presentation_ja:  
    figurename: Fig.  
    tablename: Tab.  
biblio-title: Further Readings
```

トラブルシューティング

Q 1: オプションが反映されない

- A1. PDF の生成に失敗しただけで, 前回の PDF から更新されていないかも
- A2. 書く場所を間違っている
 - yaml ヘッダの入れ子には意味がある.
 - すこしややこしいので解説

```
?rmdja::beamer_presentation_ja
```

- **pandoc** 本来の引数と紛らわしい名前があるので注意
- A3. 実際バグかも

Q 2: エラーの原因がよくわからない

- A1: キャッシュ削除すると良くなることもある
 - 前回失敗した際のキャッシュが悪さしてることは結構ある
 - {ファイル名}_cache, {ファイル名}_files を消す
 - cache = F
 - エラーメッセージが実態と矛盾してるときはまず試す
- A2: rmarkdown/knitr と \LaTeX どちらのエラーか確認
 - output file: {ファイル名}.md と出れば pandoc までは機能している
 - pandoc の変換が意図したものでない可能性はある

まとめ

結果どうなったか

- 改善したこと
 - `lstlisting.sty` より見やすいシンタックスハイライト
 - R の画像や数値出力をコピペしなくて済む
 - 一画面に収めるための構成だけ考えれば済むように
- 悪化したこと
 - 数式のリアルタイム補完は LyX が依然優秀
 - python 作業中 (jupyter への) 不満高まり
 - ポンチ絵も ggplot2 で作らねばという強迫症状
 - 以前より組版に神経質になった

改良・機能追加したいところ

- 手動インストール作業の削減
 - TeXLive を入れなくても動かせるようにしたい
 - たぶん tinytex と rmarkdown 両方がネック
- 細かいレイアウト修正
 - 例: キャプションが上か下かで統一されていない
 - XeLaTeX と LuaLaTeX で微妙に文字サイズが違う
- 他の言語のシンタックスハイライト
- ggplot2 以外で描かれたグラフの対応
 - 埋め込みはできるがフォントの調整が困難
 - igraph みたいなのか...
- **issues** に詳細

補足：細かい技術的な話

このセクションの想定読者

- 単に使いたいだけの人を見る必要なし
 - 内部処理知りたい人向け

ハマりポイント

1. Xe_ΛT_EX で取り消し線を付ける場合の問題
 - 和文に取り消し線を付けるとタイプセットエラーが発生した
 - zxjatype と ulem の競合と思われる
 - xeCJKnftef を読み込むとなんか解決した
 - 詳細: [TeX フォーラム](#)
2. Lua_ΛT_EX と Xe_ΛT_EX で文字サイズが変わってしまう

技術的に厄介だったところ

- html と pdf(L^AT_EX) とで微妙に違う挙動
 - ネット上の情報は html 前提が多い
 - pandoc チョットワカル必要
- 日本語を含む参考文献リスト
 - upBibT_EX の適用
 - 細かいオプション, 特に metropolis 特有の仕様
- RStudio Cloud で動くかは未確認
 - 日本語表示がおかしい説あり

実装の特徴







- 初期バージョンでは R 側で設定を書いていた
- pandoc のテンプレートでかなり代替できると気づく
- 結果だいぶシンプルな仕様に

日本語文献にどう対応しているか

- **jecon.bst**を使いたい
 - マルチバイト文字未対応の BibTeX
 - 日本語は upBibTeX 必要
 - biblatex ではフォーマットに不満
- rmarkdown/tinytex は日本語書誌情報処理未対応
 - 内部では自前の設定で Tex Live + latexmk を呼び出し
 - 呼び出しているラッパにオプションなし
 - 積極的に改修の気配なし (参考)
- 自前の設定を使用する (参考)
 - tinytex.latexmk.emulation = F
 - **ここ**を参考に .latexmkrc 設定
 - **Rmd** と同じディレクトリに上記を置く

- これを作るにあたって大いに参考になった資料
 - Kazutan: 『R Markdown の内部とテンプレート開発』
 - Atusy: 『R Markdown のオリジナルフォーマットを作ろう』
- 文句言ったら光の速さで PR 出してくれた Atusy 氏
- TeX Forum で質問に答えてくれた方々
- 今風のデザインのヒントを与えてくれたところ
 - pecorarista/sakuratheme
 - ナウい Beamer スライド @Dentoo.LT #23

参考文献

- 
- Allaire, JJ, Yihui Xie, Jonathan McPherson, Javier Luraschi, Kevin Ushey, Aron Atkins, Hadley Wickham, Joe Cheng, Winston Chang, Richard Iannone (2020). *Rmarkdown: Dynamic Documents for r*. Manual. URL: [here](#).
- 
- Aust, Frederik (2019). *citr: RStudio Add-in to Insert Markdown Citations*. R package version 0.3.2. URL: [here](#).
- 
- Wickham, Hadley (2019). *tidyverse: Easily Install and Load the 'Tidyverse'*. R package version 1.3.0. URL: [here](#).
- 
- Wickham, Hadley, Garrett Grolemund (2016) *R for Data Science: Import, Tidy, Transform, Visualize, and Model Data*. O'Reilly. 黒川利明・大橋真也訳『Rで始めるデータサイエンス』. 2017 年. オライリー・ジャパン
- 
- Xie, Yihui (2020) *Bookdown: Authoring Books and Technical Documents with r Markdown*. Chapman & Hall
- 
- Xie, Yihui, J.J. Allaire, Garrett Grolemund (2018) *R Markdown: The Definitive Guide*. Chapman and Hall/CRC



奥村 晴彦・黒木 裕介 (2017) 『LATEX2 ϵ 美文書作成入門』. 技術評論社